

「豊島文人会」と池袋

——「麦畑」から「アプレ盛り場」へ——

I

平成二四年一〇月一日をもつて区政八〇周年を迎えた豊島区は、今でこそ様々な施設や建物、都市内交通の集中度から渋谷区、新宿区と肩を並べるほどの東京の拠点の一カ所として人々に認知されており、平成二〇年六月一四日には渋谷―新宿三丁目―池袋をつないだ東京地下鉄副都心線が開通し、文字通り副都心の仲間入りを果たした。しかし豊島区は渋谷区や新宿区のように戦前からではなく、戦後から昭和三〇年代にかけて急速に発展していった地域なのである。もう少し具体的に言うならば、関東大震災後、帝都復興や大東京が声高に叫ばれ、昭和七年に豊島区が誕生したものの、いわば「新興の地域」であった豊島区は依然として「麦畑」が広がるのどかな土地だった。しかし戦後すぐに池袋駅前に広がったマーケット群は、一般大衆にとつて豊島区復興のシンボルの役割を果たし、池袋を中心として豊島区は「アプレ盛り場」「大衆の地域」として注目を浴びていった。そしてそんな豊島区

影山 亮

には数多くの芸術家が住んでいた。池袋モンパルナス^②などが特に有名だが、文学の世界では江戸川乱歩、大下宇陀児、山手樹一郎、花岡謙二、三角寛などいわゆる大衆文学の担い手達が多く豊島区に居を構えていた。彼らは豊島区という「新興の地域」で「新興の文学」を旗揚げした。そして豊島区が「大衆の地域」として認知されていく過程で彼らの文学もまた「大衆の文学」として認知されていったのである。そんな大衆文学の担い手だった彼らは、「豊島文人会」なるものを結成し交流を深めていたのだった。

これまで個々には彼らの仕事ぶりは広く知られているが、その交流に関してはほとんど光が当てられることはなかった。本論文ではこれまでほとんど注目されることのなかった「豊島文人会」なるものを手がかりとし、豊島区が発展していくなかで彼らが大衆文学の担い手として、広く受け容れられていく様子を見ていくこととする。

II

「豊島文人会」なる集まりについてメンバーの一人、江戸川乱歩は「わが故郷は池袋」（『今週の池袋』昭和三四年六月）において、

この辺には文士とか画家、彫刻家などが多く住んでいる。最近はだんだん減りつつあるようだが、それでも豊島区に住んでいる人達で文士会というのがあって、ときどき集まるけれども、山手樹一郎、春山行夫、大下宇陀児などもそのメンバーだ

と書いている。ここでは「文士」となっているが、他では「文人」という語を使用している。また『探偵小説四十年』（昭和三六年七月、桃源社）中の、年度ごとにあつたことを回顧している箇所には、

昭和三十年度の主な出来事

【三月】三十日、池袋「大江戸」で豊島文人会を開く。出席者、原久一郎、大下宇陀児、三角寛、春山行夫、阿部静枝、豊島新聞社長都會議員竹内雷男諸氏と私のほか数名。

昭和三十一年度の主な出来事

【一月】十八日、大塚駅前「山海楼」にて豊島文人会。参議院議員岡田宗司氏中ノ視察帰国の歓迎会を兼ねたもの。出席

者の主な人々、大下宇陀児、原久一郎、阿部静枝、榊山潤、牧野吉春、岡田宗司、本位田準一、田中佐一郎、春山行夫、中村梅吉、佐々木千里、三角寛、竹内雷男の諸氏と私

とあり、ときどき集まっていたことが分かる。この「豊島文人会」ははじめ「豊島文人懇談会」という名で発足した。乱歩自作のスクラップブック『貼雑年譜』第四卷には、昭和二五年一月二五日付の『豊島新聞』の記事が貼られている。この記事には「乱歩大いにうたう 豊島文人懇談会」という見出しで、

豊島文人懇談会は江戸川乱歩、原久一郎、大下宇陀児、三角寛、山手樹一郎、春山行夫、瀬川駿、阿部静枝、花岡謙二、竹内雷男氏等の世話人の名で約四十名の文芸家に案内状を出され：（略）二十三名が出席、花岡氏司会のもの（ママ）元には、進行されたが、黙々とよく飲むのが潤草二郎、大にうたうのが乱歩、久一郎の彩つた絵「鳥刺」とすずこさんの日本舞踊「柳の雨」はけだし当夜のかくし芸の圧巻。なお豊島文芸家を打って一丸とする豊島文人会（仮称）結成へと同会は一歩前進することを申合せて十時散会した

とある。また同巻の違うページには昭和二五年二月一七日付の「豊島区在住作家忘年会」の広告が貼られており、

このたび江戸川乱歩、大下宇陀児、三角寛、岡田三郎、榊山潤、滝川駿、坪田讓治、橋爪彦七、山手樹一郎、阿部静枝、

長谷川起義氏などの肝入りでこの二十三日の午後五時から池袋三業地入口の大江戸で豊島区在住作家の忘年会が催されることになった、これを機会に本社が提唱して豊島区在住の画家、彫刻家、詩人、俳人、新聞雑誌の関係者等一同の文化人大歓談会に致すことになりました

とある。本社とは豊島新聞社のことであり、この「豊島区在住作家忘年会」もまた前述の「豊島文人懇談会」と同様、「豊島文人会」の前身と言えるだろう。そして昭和二十七年に「豊島文人会」は正式に発足する。これは豊島新聞社において過去の新聞を調査したところ、昭和三〇年三月二十七日の記事に

来る三月三〇日午後六時から恒例の「豊島文人会」が大江戸（池袋三業地入口）において行われる。この文人会は昭和二十七年大塚寿々村において第一回の生ぶ声をあげて今日まで毎年行われて来たもの。発起人としては江戸川乱歩、原久一郎、三角寛、大下宇陀児、春山行夫、阿部静枝、豊島新聞社（社長竹内雷男）の諸氏。なお出席申込みのお方は本社まで会費十円

とあることから判断できるだろう。^④この他に昭和二八年二月一日、昭和三十一年一月二十七日付の『豊島新聞』で「豊島文人会」の交流が報道されている。豊島区に住んでいた文人たちの一つの拠点であった「豊島文人懇談会」は、「豊島区在住作家忘年会」を経て、昭和二十七年に「豊島文人会」として正式に発足したのだっ

た。

III

「豊島文人会」に所属していた文人たちの中での大物は探偵小説界の第一人者である江戸川乱歩だ。三重県出身の乱歩は七〇年の生涯で四五回引越しをしているが、引越し魔であった乱歩の終の棲家があったのが現在の豊島区池袋である。池袋に引越してきた経緯について乱歩は、

芝区車町の家は高輪の大木戸あとに近く、京浜国道と東海道線からすぐの場所にあったので、土蔵の洋室が気に入って住みついては見たものの、汽車と電車と自動車の騒音が、だんだん耐え難くなってきた。（略）二た月ばかり借家を物色したあとで、池袋三丁目の今の住居を見つけて、七月に引越しをした。池袋の家にも昔風の土蔵がついていた。実はそれが気に入ったのである。

と振り返っている。乱歩が池袋に引越してきたのは昭和九年のことだった。土蔵がついていたこの家を乱歩は大変気に入り、昭和四〇年に逝去するまで同地に住んでいた。そんな乱歩は池袋で探偵小説を執筆するだけでなく、地域のためにも貢献をしていた。すなわち町会役員を務めていたのである。

あなたにも是非役員になってもらいたい。第三部長を引き

うけて下さらぬだろうか、という話であった。(略)のちには私も町会副会長まで出世して、文士会長と、文士副会長といふので、よく一緒にいろいろな会合に引っぱり出されたものである^⑥。

乱歩は町会副会長として同じく豊島区在住の天下宇陀児とともに、仕事に従事していた。町内の仕事をほとんど引き受けていた乱歩は、昭和二九年に開かれた池袋振興座談会にも出席しており、その様子が昭和二九年四月一八日付の『都新聞』で報道されている。このとき既に乱歩は町会副会長を務めてはいないが、それでもなおこのような座談会に呼ばれているということは、乱歩がそれだけ池袋に密着していた文人である証拠だ。

乱歩と共に日本における探偵小説の牽引役であり、盟友ともいえる天下宇陀児もまた豊島区の文人であった。

彼が三田から、今の住居の池袋三丁目、土地では駅を中心にしてそこから一帯を西口と呼ぶが、その西口の立教前へ移転してきたのは昭和九年六月三十日、雨のバラつく薄曇りの日であったが、その同じ日に私の方は、大塚から、今の住居の雑司ヶ谷五丁目、池袋東口の鬼子母神近くへ移転してきた。

この同じ日の移転は、申合せをしたのでもなんでもなく、全く偶然の一致だった^⑦。

と振り返っているように、長野県出身の宇陀児が現在の豊島区雑司ヶ谷に引越してきたのは、乱歩と同じ昭和九年のことであっ

た。また宇陀児は乱歩と同様に町内会の役員、町会長を務めていた。そんな宇陀児は、町民たちの先頭に立ってさまざまな問題を解決していた^⑧。偶然の一致で同日に転居してきた二人の探偵小説家。豊島区の文人として前者は昭和一年に少年向け探偵小説の第一弾「怪人二十面相」(『少年倶楽部』昭和一年、大日本雄辯會講談社)を発表して圧倒的支持を得た。後者は『新青年』に次々に作品を発表し、昭和二年にはNHKのラジオ番組「二十の扉」でレギュラー解答者として人気を博したのだった。

そんな二人より以前に豊島区に居を構えていた大衆小説家がいいた。山手樹一郎である。山手は「桃太郎侍」(『岡山合同新聞』昭和一四年、合同新聞社)や「夢介千両みやげ」(『読物と講談』昭和二三年、公友社)など多くの時代小説で大変な人気を博し、貸本業界でも凄まじい人気で社会心理研究所の「大衆文学の読まれ方―貸本屋の調査から―」(『文学』昭和三二年一月、岩波書店)の「好きな作家」の項目においても夏目漱石、江戸川乱歩、山手樹一郎の順でランクインしている程である。栃木県出身の山手が現在の豊島区要町に転居してきたのは、「私がいまの要町に移ったのは、当時まで長崎村北荒井といわれていた大正十三年の五月のことだった」^⑩とあるように大正一三年のことだった。以来昭和五三年に逝去するまで、同地に住み続けていた。ここで注目したいのは、乱歩や宇陀児が豊島区に転居してきた昭和九年の時点で既に探偵小説家としてデビューし、活躍していたのに対して、山手の場合は豊島区に転居する以前の作品は現在判明している限りではわずか六作であり、残り五〇〇作以上の著作をほぼ全て豊島区で執筆していたことである。まさに山手は、豊島区から一般大

衆へ向けてその作品を発信していたのである。乱歩や宇陀児もまたそうだった。彼らは「新興の文学」であった自分たちの作品を、まだ「新興の地域」であった豊島区から発信していったのである。そして豊島区が次第に「大衆の地域」として発展していく流れの中で彼らの文学も一般大衆に受け入れられ、「大衆の文学」として認知されていったのである。そんな彼らの拠点が「豊島文学会」であったのだ。

Ⅳ

乱歩や宇陀児、山手らが居を構えていた豊島区はどのようにして現在のような「大衆の地域」として発展していったのだろうか。『豊島区史』（平成四年三月、東京都豊島区）によれば、かつて農村地帯であった現在の豊島区域は明治元年六月に新政府の武蔵野県知事の管轄下に置かれ、明治四年にはそのうちから長崎村を除いた町村が東京府に編入された。明治一八年に今の赤羽線・山手線となっている赤羽―品川間が開業した際も、池袋に駅は設けられず、その後明治三六年に田端への支線を分岐させるにあたり、当初は目白での分岐が想定されていたが、地形の都合や住民の反対運動などがあって目白ではなく池袋に駅が設けられた。いま手元にある『池袋名鑑』（昭和四五年二月、池袋東西名店会事務局）は、『月刊いけぶくろ』という雑誌に掲載されていた池袋にゆかりのある芸術家たちの池袋に関する随筆を集めて一冊としたものである。これは区内で商店を開いている人たちに配られたもので、一般大衆にとって身近な内容の資料と言えるだろう。そ

のなかで豊島区に住んでいた童画家の武井武雄は、

大正も中期七年に私は池袋に一八〇坪程度の土地を借りてアトリエを建てて貰った。(略)池袋駅なんでものは廃駅といてもいい位みすばらしいもので、お隣の大塚目白などのにぎやかな街に比べるとまるで田舎駅だった¹²⁾

と記して述べている。池袋について詳細な調査を行った根岸清次も「池袋といふ街の生態(二)」（『新都市』昭和三〇年五月、都市計画協会）において、

沿線に識見のある大地主の一人は当時を回顧しながら、「それでも、玩具のような汽車が煙をはいて畑の中を通り初めた(ママ)時は、子供のようになうれしかった」と述懐している

と報告していることから、池袋駅が出来ても依然として豊島区は静かな地域に変わりはなかったことが分かる。『豊島区史』（昭和一六年二月、豊島区役所）においても、「池袋駅のある処は、雑司ヶ谷と池袋との森の中間の地で、人家はなく昼尚寂しく、夜には辻強盗が行人を脅かして物騒な場所」と書かれている。その後、東京、いや日本全体にとっても大変動をもたらした関東大震災が大正一二年に起こり、多くの人々が新しい住まいを求めて郊外へと移動した。山手もまた前述のように大正一三年に現在の豊島区要町へと居を移すが、「池袋の奥の麦畑の真ん中へ、小さい家をたてることになったのである」¹³⁾。

私が長崎村（今の要町）へ移ったころは、あたりはまだ広々とした麦畑で、というよりそういう麦畑の中へ地所を借りて小やかな住居を建てたのだから、庭へ出てみても目につく家は点々として、ほんの五六軒しかなかった。

私は家内といっしょに、弟に案内されてその土地を見に行くことにした。なるほど、駅から男の足で十五分ほどかかるのだから、少し遠いには遠い。しかもその土地は麦畑になっていて、ここに家を建てると、麦畑の真ん中に住むことになる。三月の末のことで、この時ほど青麦畑の色が目にしみたことはない。（略）思い切ってその麦畑を借りることにした。そして、とうとう長崎村の住人となったのは、大正十三年の五月のことで、それ以来この正月がくれば、四十四年間、ずっとここに住みついてしまったのである。

というように当時の豊島区域ののどかさを「麦畑」という語で表現している。確かに前掲の昭和一六年版『豊島区史』でも「麦畑であった池袋駅西口付近」と書かれているし、この地は「武蔵野の谷の一特色をなす水田が設けられてをり、その谷壁には畑が開かれてゐる」（『日本地理風俗大系』昭和六年一〇月、新光社）、「新田開墾、副業奨励、あるいは農耕技術の進歩等で非常な躍進をとげ、産物は多種類となり、その量も増加した。特に、この豊島地方の土質は耕作に適していた」（『池袋名鑑』（昭和四五年二月、池袋東西名店会事務局）とあるように畑が広がっていた。『失

われた耕地―豊島の農業―」（昭和六二年一二月、豊島区立郷土資料館）によれば、近代に入っても「長崎村の大根、茄子、胡瓜」、「巢鴨町の小かぶ」、「巢鴨村の筍」、「高田村のかぼちゃとなす苗」などは特に有名で江戸への野菜類一大供給地であった。『東京郡統計年鑑』（東京都庁）は昭和二四年からの調査なので戦前の農地率は分らない。しかし戦前からかなり減少しているだろうが昭和二四年でもなお、豊島区の農地率（田＋畑）は七四・三七％を示している。同時期の渋谷区は一五・六四％、新宿区においては〇％である。ここからも豊島区はいかに田畑が多い地域であったかがうかがい知れるだろう。

一方同じ頃の新宿に目を移すと、既に盛り場として認知されていた。『新修 新宿区史』（昭和四二年三月、東京都新宿区役所）によれば、そもそも新宿は甲州街道・青梅街道の分岐点で、江戸時代から重要な宿場で、その頃から発展していったのである。『東京市政概要』（昭和三年九月、東京市役所）を開いてみると、「省線新宿駅付近には、帝都復興が漸く緒に就ける今日、早くも堂々たる現代的商舗が軒を並べて、夜間に於ては宛然小銀座の觀を呈するに至つたのである」と謳われている。また渋谷もまだ区として成立していない昭和五年の時点で既に、

震災が機縁に変貌した盛り場の一つとして道玄坂がある。
夕陽せまる頃、山手線の電車の中から、小高い百軒店のイルミネーションは不夜城のごとく輝きはじめる。この頃から道玄坂の賑ひは幕をきつて落とされるのである。

と伝えられている。

昭和五年三月二四日からの帝都復興祭を経て、ついに昭和七年一〇月一日に大東京が誕生する。それは同時に豊島区の誕生でもあった。「豊島文人会」の前身である「豊島文人懇談会」の世話人だった花岡謙二は「大東京雑感」という短歌で、

昭和七年十一月、大東京実現につれてこの町も市に併合され、豊島区長崎東町三丁目と改称される。

大根畑 いや ここは三ツ葉畑だった ここに家を建てて

もう八年 武蔵野よ がんばれ 市街が ぐんぐん 押して

くる 押してくる 武蔵野の渚でもまれてゐる僕 都会にも

原野にもつけない僕 東京都豊島区長崎東町三丁目の 大根

畑の雨 雑草畑の雨 われらの市長 青風永田秀次郎の顔が

ちらちら 桧垣の外に²⁰

と、山手と同様に「三ツ葉畑」「大根畑」「雑草畑」という語で当時の豊島区を表現している。大東京の一区となったことで都会化を懸念していた花岡だが、池袋駅周辺は若干栄えたものの依然として豊島区は静かでのどかな地域だった。前掲の『東京市政概要』の昭和八年版を見ると、新宿を擁する四谷区は「躍進的發展の機運を掴み、遂に『山手銀座』の名を成すまで繁栄するに至る」ほどであり、渋谷区は「道玄坂通を中心に商業地として發展し、(略)旧渋谷町は新宿と共に旧市西部の関門をなすほどの發展ぶりであった。しかし豊島区は「荒川、浅草の両区に次ぐ大人口を擁している。(略)省線池袋駅を中心に交通至便」である他は、

これと言ったことが書かれていない。昭和九年に引越してきた乱歩も「ばくがきた頃は近所にも畑や庭のある家が多かった」ばかりでなく、

池袋は実にさびしかった。今とは全くちがう非常に狭い常盤通りが唯一の中心地帯で、商家が軒を並べ、新開地の繁華街という感じだったが、そのほかの一带は、点々として住宅が建っているばかり、町らしい町もなく、立教大学の周辺などは、ずっと原っぱで、まだ畑があったように覚えている²¹

と、これまた「畑」という語を使用して振り返っている。そもそも乱歩は都会の喧騒から逃れて池袋に転居したのだから、区として成立してもなお豊島区が未だ閑静な「新興の地域」だったことに不満もっていたわけではないだろう。昭和十一年一月に東京土産協会から出版された青山光太郎『大東京の魅力』によれば、

現代の盛場としては先づ銀座を筆頭に、浅草、新宿を三巨頭として、上野広小路、神田の神保町、人形町、数寄屋橋から丸の内、牛込に神楽坂、渋谷の道玄坂に百軒店、戸越銀座に小山銀座等が主なるもの

であり、池袋は当然挙げられていない。

そして、やがて太平洋戦争をむかえ、豊島区は空襲によって壊滅的な被害をこうむる。

表と裏の大きな建物が全焼したのに、間にはさまれたわたしの家だけは、不思議に助かった。(略) わたしの家だけがボツンと残って、祥雲寺下の辺から、わたしの家の土蔵が異様に大きく眺められたものだし、又、わたしの家から池袋駅までは、すっかり焼け野原になってしまつて、家の障子をあけると、これも半分こわれた池袋駅が、直接眺められたものである²³。

と乱歩は振り返っているが、雑司ヶ谷に住んでいた宇陀児の家は全焼している²⁴。

その池袋駅付近に敗戦の象徴とも言える闇市が姿を見せ始める。池袋東口の闇市は戦後の盛り場のうちもつとも早くできあがり、当初は東口だけだったが雨後の筍のようにあつという間に拡大した。「今日の東池袋二丁目地内二万九三八〇平方メートルが、当時の焼け跡に建てられた池袋東口ヤミ市の土地」(松平誠『ヤミ市 東京池袋』昭和六〇年六月、ドメス出版)であつたほど巨大になり、西口周辺も含めて昭和二一年二月には三万五〇〇〇店の露天商が池袋駅に周辺に集まつていた。闇市が誕生すると自然発生的に周辺で生活する街娯や浮浪児が集まり、ヒロポンやカストリが氾濫した。同時代のカストリ雑誌『ナンバーワン』では

池袋といふところは昼も夜もその表情を変えない。脈拍は常に荒っぽく、呼吸はいつでも急がしい。夕暮れともなれば何万何千という粉食生活者が東西の両口からドツと吐き出されてくる。それを狙って待ちうける西口のマーケット、東口

のイカモノ飲食店、映画館、インチキレビューの羅列——、どんな食欲と情欲の渦巻、アスファルトの大通に面した六十軒の屋台店は正に狂乱の胃袋、バカ貝の串焼、代用ソバ、代用パン、シチュー、スープ、モツヤキ、トウモロコシ、フカシ芋、コロツケ、テンブラ等々²⁵。

と、当時の池袋の様子を伝えているし、水上勉の『飢餓海峡』にも池袋の闇市の様子が描かれている。木村毅『東京案内記』(昭和二六年一〇月、黄土社書店)においても、

池袋といへば、われわれは、新宿や渋谷よりも、もつとガラの悪い盛り場をすぐ頭におもひ浮べる。じつさいは姦淫、窃盗、暴力などの犯罪数では、この土地は、遙かに他の二つをしのいでいるのだ

と、書かれている。この闇市、東口は昭和二七年に姿を消したが西口は昭和三七年まで残っていた。新宿にも終戦直後闇市が見られたが、昭和二六年末までには姿を消していたことから池袋の闇市がいかに長く保つたかが分かるだろう。これが後の池袋に怖い町というイメージの起因になつたが、同時に新宿や渋谷と同じく盛り場として池袋は人々に認知されていく。

戦後すぐ池袋東口には山手映画が建てられ、一日八回の上映で一万人を集めることもあつた。昭和二三年には「豊島文人会」のメンバーである三角寛が中心となつて経営していた人生坐も池袋東口に開館し、昭和二五年頃になると豊島区の映画館は二〇館近

くにまで増加する。こういった映画館は一般大衆の娯楽に寄与していた。先述した根岸論では池袋に住む人たちにインタビュウを行っている。映画館関係者にもそれを行っており、

理屈ぬぎに楽しもうといふ人達が多いですネ。お涙ものよりも、チャンバラにも相手が集まります。(略) おそらく、洋画、日本画を問はず、池袋で損をしてる映画館で、まづないでせう。まだまだ映画館はふえてもいい、と云ふことになりさうですネ

と答えていることから、池袋が映画と密接に結びついていたことが分かるだろう。池袋が盛り場として発展していくにしたがつて「大衆の地域」としても認知されていくのだった。それにしても池袋を中心とした豊島区の発展のスピードは他区には見られないほど急激だった。山手の子息である井口朝生は「ぼくは昭和二十五年に復員した。池袋は(ぶくろ)とよばれるケバケバしい化け物の街に変貌していた」と書いているし、『東京案内記』にも、

地元の人たちが、「もう渋谷に負けない、そのうち新宿も追いつく」と気負つて毎日調査班をくりだしてほかの盛り場を偵察しているというのもうそじゃあるまいという気がする。(略) 池袋の戦後の発展は、素晴らしいというより寧ろすさまじい、といった方がびつたり来る

と書かれている。東京観光協会『東京案内記』(昭和三二年四月、

河出書房)でも、「池袋は戦後急激に膨張した盛り場である」と紹介されている。急激な発展は留まることを知らず、手元にある東京都豊島区立中学校教育研究会『わが豊島』(昭和二八年一月)には、

最近の統計が示す通り、こゝは東京駅に次ぐ乗車客を示している。潮が引いていくように、人の波がだんだんと遠のいていく頃、商店街では今日の生活が始まる。家庭の主婦の買い物や勤め帰りの人々の買い物にあらゆる種類の店があり、そして休息、娯楽のため、映画館・寄席・各種の飲食店が立ち並び、今日の慰安と明日への元気を与えてくれる。(略) 池袋の玄関口は都心への結びつきを都電、地下鉄開通、バスの新路線の拡張などによって大きな自信となり、第二の新宿を目指しつゝある。池袋の発展は急速に形を整えていく

と報告されているし、前掲の『池袋名鑑』にも「戦争が終わった時に生まれた池袋という街は、戦後の街です」と書かれている。昭和二九年には東京地下鉄丸ノ内線が池袋―お茶の水間で開通し、より一層池袋駅周辺は混雑した。昭和三二年五月の『週刊新潮』(新潮社)には「第三の盛り場・池袋 動く東京の一角」という特集が組まれるほど池袋の急激な発展ぶりは注目されていた。

戦後に繁盛したアプレ盛り場のなかで、池袋は筆頭第一だそうだ。(略) 戦後のアプレ盛り場として脚光をあびたのが

池袋、この十年のあいだに渋谷を抜き新宿に迫る勢いをみせている。もつとも、アプレの街ブクロの生態もあふれでる若さがさまざまなアンバランスや悪の華を咲かせているのはいたし方ない。「ブクロはコワイ、柄が悪い」という印象は、ブラック・マーケットはなやかな時代はむろんのこと、いまでも池袋の横顔に丹下左善のような不気味な傷あとをのこしているのだ。ところで、このアンバランスと柄の悪さこそ、アプレの街ブクロの魅力であり、わきあがる生命力の象徴だといえないこともないのである。(略) 新宿、渋谷、池袋という山の手盛り場のビッグ・スリーのうち、アプレの街池袋こそ、どこまで発展するか得体のしれないダークホースといつてよからう

というように、池袋は「戦後のアプレ盛り場」の「筆頭」として注目され既に渋谷を抜き新宿に迫る勢いで、地価も跳ね上がり、マーケット群の名残が悪所としてのイメージを想起させていることが写真とともに伝えられている。当初、池袋駅前だけだった繁華街の気配は一気に周辺の地域にも広がっていった。乱歩は、

つい十数年前までは何の変化もなかったのだが、戦後は急激に発展してしまった(略)。それからどんどん変って、今ではデパートの集合地帯のように軒なみビルがたち、証券会社とか金融業者なども多くなっているようだ³⁰⁾

と書いているし宇陀児も、

駅からこつちしばらくのうちは、庭木はおろか、地べたというものを見ることのできなくなつた。舗装道路とビルで地べたはすべてコンクリートの下に蔽いかくされた。地べたがむきだしで、そこに庭木が生えているのは私の家だけになつた

と書いていることからそれが分かる。街が急激に発展すれば、人口もまた然りである。『統計からみた戦後東京の歩み』(昭和四六年三月、東京都総務局)を参考にすると、昭和一五年の国勢調査で三一万二二〇九人だった豊島区の人口は昭和二〇年には九万二一九二人にまで落ち込んでいた。しかし昭和二二年には一四万九五九七人、二五年には二二万七四一人、三〇年には三六万五七人と回復し、三一年には戦前の水準を超え、三五年には三六万三一九三人、四〇年には三七三二二六人となつた。二五〜三〇年の伸び率は渋谷以上で新宿に迫る勢いを見せ、三〇〜三五年には一二〇・八%、三五から四〇年は一〇二・七%と新宿さえも上回る増加を見せている。『商業統計調査』(東京都庁)を見ると、区内の商店数も昭和二四年の三九九四店から昭和四三年には八四七七店と増加傾向を示している。新宿区(四五九三↓九九八〇)に迫り、渋谷区(三五二三↓六三一四)よりも上の数字である。こうして「麦畑」から「アプレ盛り場へ」へと急速に発展した豊島区は、現在では渋谷区と新宿区に肩を並べるほどの副都心となつたのは言うまでもないことである。

大東京が声高に叫ばれるなか、昭和七年に成立した豊島区は依然として「麦畑」が広がる「新興の地域」であった。そんな豊島区に探偵小説、時代小説という「新興の文学」の担い手たちが期せずして居を構え始める。彼らは豊島区から作品を発信していく。そんな彼らの文学は数多くの一般大衆を魅了し、その娯楽に多大に寄与し、「大衆の文学」として根付いていく。一方戦争で甚大な被害をこうむった豊島区だったが、終戦直後のマーケット群発生から、昭和二〇年代後半から三〇年代にかけての発展ぶりとは他の地域に比べ、目を見張るほどの急激なものだった。言い換えればのどかで「麦畑」が広がっていた「新興の地域」は、「アプレ盛り場」と称される「大衆の地域」に急速に変貌していったのだ。昭和二五年の「豊島文人懇談会」、「豊島区在住作家忘年会」を経て「豊島文人会」が結成されるのが昭和二七年。「新興の地域」での「新興の文学」から、「大衆の地域」での「大衆の文学」という流れの中心には、「豊島文人会」が確かに存在したのだった。

注

- (1) 豊島区公式ホームページ (<http://www.city.toshima.lg.jp/index.html>) によれば平成一八年の調査で池袋駅の一日の乗降客は約二六四万人と、新宿駅に次ぐ世界第二位に達した。
- (2) 大正末期から昭和戦前にかけて豊島区には貸し住居付きア

トリエ群が存在し、多くの芸術家が暮らして活動の拠点としていた。その地域は池袋モンパルナスと呼ばれ、パリ市内の南西部にあるモンパルナス地域に似ていたことに由来している。これは芸術家たちの中心的存在であった小熊秀雄が命名し、「池袋モンパルナス」(『サンデー毎日』昭和一三年七月、毎日新聞社)という随筆中の「池袋モンパルナスに夜が来た学生、無頼漢、芸術家が街に出る 彼女のために、神経をつかへ あまり太くもなく、細くもない ありあはせの神経を――」という箇所が初出であると言われている。また小熊秀雄は昭和一五年に肺結核により現在の豊島区千早で逝去しており、中野重治が『改造』(改造社)昭和一六年一月号に追悼の組詩「古今的・新古今的」を発表している。この詩は三篇から成り立っていて、特に第一部の「千早町三十番地」では「千早町三十番地東荘はどこなりや 落合にもなし 長崎にもなし 千川にもなし そこでまるまる逆もどりして線路を踏み切りて行く それは新道路にそえる古くさき旧道路 新道は人まだ通らず 白きプラスターに朝の陽てり あちこちにむしろのきれ敷かれたり その掘鑿のどの旧道に積まれ 旧道はでこぼここのほりくだる そこをのほりくる女あり どうかの掃除婦ならん 鼻より白き息はき 袖にて口もとかけておおう そこにたたみ屋あり 軒に七輪を置き 朝のダドンをおこすところ 青きほのおの揺れるを 犬二ひき前あしを伸ばして不思議そうに見える そこに屑塚のある畑あり 老婆三人、片手にバケツをさげてそれをあさる そこにアサリ屋あり ごま塩のおやし ぬれた小刀にて一心に剥身をつ

くる。その軒にブリキの手形さがり。この奥東荘と書いて指さす。なるほどそこにあり。崖によせかけ。一つのごみ箱のごとくかなしく」というように、まだ発展していない豊島区を克明に描いている。

- (3) 『豊島新聞』は国立図書館には昭和二三、二四年のみ、豊島区立図書館には昭和三五年からしか保存されていない。豊島新聞社においても昭和三〇年代以前の新聞はほとんど保存されていないという状況である。今回、豊島新聞社のご厚意によって昭和三〇年三月二七日の記事を発見するに至った。

この場を借りて感謝したい。また乱歩の『貼雑年譜』における「豊島文人会」関連の部分は拙稿『貼雑年譜』に見る江戸川乱歩と山手樹一郎の交流」(『大衆文化』第一〇号、江戸川乱歩記念大衆文化研究センター)で紹介しているので、併せてご覧頂きたい。

- (4) 乱歩と同じく会のメンバーである詩人の春山行夫も「年譜」(『人物書誌大系二四 春山行夫』平成四年六月、日外アソシエーツ株式会社)において、「昭和三三(一九五八)年三月一日 豊島文人会(白雲閣)に出席し江戸川乱歩、榊山潤らと歓談」と振り返っている。

- (5) 江戸川乱歩「池袋三丁目に移転」(『探偵小説四十年』昭和三六年七月、桃源社)。

- (6) 「町会役員となる」(『探偵小説四十年』昭和三六「一九六二」年七月、桃源社)。

- (7) 「乱歩分析」(『別冊宝石』昭和二九年十一月、岩谷書店)。
(8) 時代小説、探偵小説家の角田喜久雄は「池袋詣」(『月刊い

けぶくろ』昭和四二年四月、池袋社)において、「戦前、私は池袋の駅へおる度は(ママ)、はて、西口へ出ようか東口にしようかと、一瞬迷うのが癖になった時代があった。西口の近くには江戸川乱歩邸宅、東口には大下宇陀児邸があったからで、今日はどこへ先に行こうかと迷ったわけである。

私にとっては、お二人とも先輩であると同時にかけがえのない親しい友人であった。(略)二人が、東と西と分れてはいても、池袋駅に間近い辺りに、期せずして永いこと居をかまえていたということは、何かふしぎな機縁という気がする。

戦後推理小説のブームがやってきて若い作家達が輩出した頃は、両氏を訪問する者がひまもきらず(ママ)一時若い作家の間に池袋詣という流行語まで出来たくらいであった」と回想している。ちなみのこの「池袋詣」は有名な随筆だが、これまでその初出が不明であった。今回の調査でそれが判明したことも付け加えておく。

- (9) 大下は自身が町会長を務めていたことに関して「大下宇陀児アルバム」(『宝石』昭和三七年五月、宝石社)で、「一九四五年夏・昭和二〇年終戦直前、私は町会長をしていた。焼野原に最も早く尤も多く野菜畑を作って自給自足をはかったのは私の町会だった」と回想している。また昭和二七年九月二三日付の『朝日新聞』には、大下が町民と共に雑司ヶ谷の下水処理問題で水道局と談判している記事が掲載されている。

- (10) 山手樹一郎「あのことこのこと 五」(『山手樹一郎全集』二四卷月報、昭和三六年一月、講談社)。

(11) 山手樹一郎に関する研究は現在ほとんど進んでおらず、その象徴が著作年譜であった。管見の限り山手の年譜は一三本

あるが、八木昇「山手樹一郎年譜」(『大衆文学大系 二七』昭和四八年七月、講談社)は他のものに比べ格段に詳細なもので、昭和四七年まで記載がある。しかし、それでも漏れや誤りがあり、著作自体も全て網羅されていない。そういったなか、拙稿「新・山手樹一郎著作年譜」およびその製作過程(『立教大学大学院日本文学論叢』第一三号、立教大学大学院文学研究科日本文学専攻)においてその状態はかなり解消された。

(12) 武井武雄「池袋昔話」(『月刊いけぶくろ』昭和四二年七月、月刊いけぶくろ社)。ちなみ同随筆で、「とてもハイカラな菓子がいりましたからどうですか」というので何だと聞いたら、何とそれがドロップだった。こんなものはもう明治の頃から信州の田舎にさえあったものでハイカラどころのしろものではない。当時の池袋なんてその一事によってもわかる未開発国で、都心のデパートで買物しても池袋だというともう届けてはくれなかった。他府県の扱いである」とも書いている。ここからも当時の池袋の様相がうかがい知れるだろう。

(13) (10)に同じ。

(14) 山手樹一郎「あのことこのこと 六」(『山手樹一郎全集五月報』昭和三六年二月、講談社)。

(15) 山手樹一郎「目にしみた麦畑」(『月刊いけぶくろ』昭和四三年一月、池袋社)。この資料は今回の調査で新たに発見さ

れたものである。

(16) 添田知道も「文人墨客閑客」(『月刊いけぶくろ』昭和四三年一月、月刊いけぶくろ社)において「いけぶくろ。——私に住んだ頃を思うと、文字通り「隔世」の感である。大正大震災後の下町のバラック住居から、長崎町に移ったとき、東京市内で会う友に、「長崎へ越したよ」というと、九州の長崎と早合点されるような時代であった。ムサシノ線椎名町から北へ十分、池袋駅から西へ徒歩二十分の、田畑の中だった」と、振り返っている。

(17) 酒井真人「東京盛り場風景」(昭和五年一月、誠文堂)においても新宿は「新宿の歴史は古い。その昔甲州街道と青梅街道との咽喉を扼した、重要な宿場として栄えてゐた」と書かれている。

(18) (17)に同じ。

(19) 花岡謙二は現在の東京都千代田区に生まれ、大正八年に豊島区に転居してきた。そして大正九年に池袋西口駅前にミドリヤ書店を開店し、大正一三年には要町に地方出身の立教大学生向け下宿屋培風寮を建てるなど、豊島区と関係が深い人であった。ちなみに花岡は、多くの豊島区民が読んでいた『豊島新聞』において一般投稿の短歌や詩の選者も務めていた。

(20) 花岡謙二「大東京雑感」(『短歌創造』昭和七年一〇月、新短歌協会)。

(21) 江戸川乱歩「わが故郷は池袋」(『今週の池袋』昭和四四年六月)。

(22) 江戸川乱歩「池袋二十四年」(『立教』昭和三十一年十月、立教大学)。

(23) (22)に同じ。乱歩の家は焼け残ったが入口の大きな門、塀、物置小屋は焼失した。

(24) 宇陀児は空襲で家を失い、地面から二メートルほど掘り下げた半地下壕に住まい兼町会事務所になっていた。昭和二十一年七月の『寶石』(岩谷書店)には大下が玄関前で立つ写真とともに、「この真暗な入口は、ナイトクラブへの入口ではない、町会長大下宇陀児氏の書斎であり、寝室であり、大切な町内の人達の会議室でもある、地下五尺の壕舎大下家への玄関なのである」というグラビアページが掲載されている。

(25) 伊藤樹二「池袋藤栗探訪記」(『ナンバーワン』昭和二十二年一〇月、ナンバーワン社)。

(26) 歌手の青江三奈は昭和四四年七月に『池袋の夜』(吉川静夫作詞、渡久地政信作曲)を発表する。この曲は一五〇万枚を超えるセールスを記録し、青江自身最大のヒット曲となった。さらに第二回『全日本有線放送大賞』金賞、第一回『日本レコード大賞』歌唱賞を受賞し、第二〇回紅白歌合戦でも歌われた。同曲に関して評論家の川本三郎は、戦後の闇市の名残がある人生横丁を、昭和四十四年の『池袋の夜』に読みこむ。作り手には、池袋は、どんなに新しい町になっても、町の底には、いわば古層のように戦後の闇市があるという思いがあったのではないか(『荷風!』平成二〇年三月、日本文芸社)と解説している。

(27) 大分県で生まれた三角寛は昭和八年に豊島区雑司が谷に転

居してきた。その後人生坐や文芸坐などの映画館の経営に携わり、大衆の娯楽に寄与した。「豊島文人会」にも前身の「豊島文人懇談会」、「豊島在住作家忘年会」の頃から深く関与していたメンバーの一人である。

(28) 井口朝生「おさな友達」(『読切倶楽部』昭和四一年一月、三世新社)。この資料も新たに発見したものである。

(29) 丸ノ内線建設に関しては「東京地下鉄の池袋・神田間建設工事と電気施設」(『電気鉄道』昭和二八年七月、鉄道電化協会)に「山手線の池袋、大塚方面の交通量は頗る多く、池袋駅の如きは、一日の乗降人員は五〇万人に及び、戦前の一倍半に達する有様である。而も池袋方面より都心に向つて放射状の高速道路交通路線はなく、止むを得ず山手線により非常な迂回を余儀なくされて居る現状である。又沿線には各種学校、大運動場等も多く、之等の地点を通過する高速道路線は多年要望せられた所である」とある。

(30) (21)に同じ。
(31) 大下宇陀児「草木傷心賦」(『釣・花・味』昭和四二年、養神書院)

付記

今回豊島新聞社、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターには大変お世話になった。
この場をお借りしてお礼を申し上げます。

(かげやまりよう 大学院後期課程在學生)